

# くらがね通信

No.69 (深緑号)

乗鞍岳と飛驒の自然を考える会

2017年7月15日発行

<http://iidalaw.net/norikura.html>

## 環境講演会要旨

### 立山のライチョウ ～データから見る繁殖・生息数など～ (その2)

富山県雷鳥研究会 松田 勉

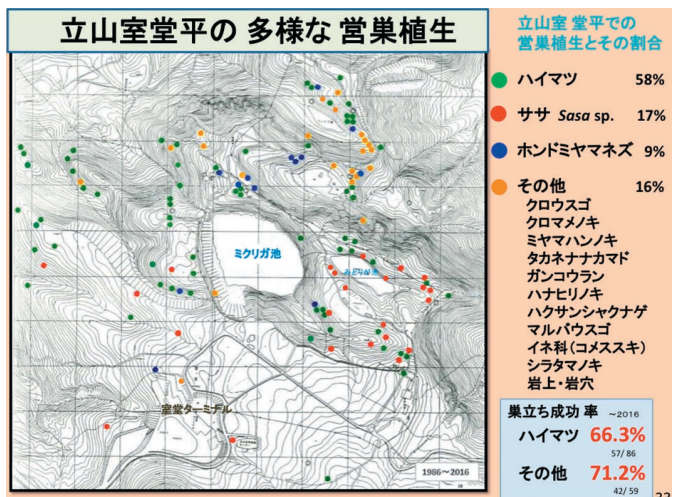
録音文字化：住 壽美子

#### 〔多様な営巣地〕

ハイマツ地帯の巣では1日1卵か2日に1卵が普通だが、立山では2日に1卵が多い。平均6卵でハイマツの枯れ枝を使って産座を作る。抱卵日数は21～24日、立山は23日が多い。最高で26日がある。平年7月5日～12日に巣立ちを迎える。ライチョウはハイマツが一般的になっているが、立山ではハイマツは58%しかなく、ササ等の植生も利用している。植生別の巣立ち成功率はハイマツ66.3%であるのに対し、他の植生の方が高い(71.2%)と言う結果が出ている。営巣には色々な所を使っている。斜度72度で10mの崖のタカネナナカマドの所や、クロウズゴ、ホンドミヤマネズ、ササ、キバナシャクナゲの中、すぐ近くにハイマツが有るシラタマノキの僅か20×50cmしかないような所にも作っている。その他に火山ガスで枯れたハイマツの中や、又ハイマツの奥6mの所に作ったものもいた。この巣は6月29日にみつけた時には3.9m積雪が有った。この雌はハイマツのすぐ入った所に作ったつもりなのに雪がどんどんとけて結果的に奥になってしまった。基本的には最初からハイマツの奥に巣を作るライチョウはいない。

変わったものには、ガンコウランの中に巣を作る雌もいる。雌が餌を食べに行くと卵がむき出しになる。またヒロハコメススキの間や、血の池とリンドウ池の間の遊歩道の縁石の僅か17cmのホンドミヤマネズの間、あるいは岩の穴に作るものもいる。立山では58%がハイマツ、17%がチシマササ、9%がホンドミヤマネズ、その他の植生が16%で11種類が使われている。2014年までの報告書で各地ではどんな植生を使ったかを見ると、頸城山塊の火打岳ではハイマツを44%が使っており、その他の植生が4種類で、ハイマツを含めて5種類の植生を使っている。

北アルプスでは、ほとんどがハイマツで、乗鞍岳では全てハイマツを使っている。薬師岳ではササ、御嶽では2010年にキバナシャクナゲを使っているものが1つ見つかった。御嶽では沢山巣が見つかったが、報告書に卵の個数は書いてあるが、植生は書いてない。多分ライチョウはハイマツに巣を作るものと思われていたので、記録が無いのかもしれない。白山と南アルプスでも



ハイマツで、この事から立山はとても多様ということが言える。ハイマツは極東にしかないので、ハイマツを利用できない所では、ヒースを利用している。ライチョウにとってハイマツが絶対条件ではないということが分かる。

地獄谷の火山ガスが出る地点が有るが、そこは東日本大震災が起きる 2011 年までは緑の素晴らしい植生だった。2012 年から震災の影響から火山活動が活発となり、赤茶けてきた。2013 年もドンドン赤茶け、去年は赤茶けた葉も全部落ち枝だけになった。こういう所でも 2013 年と 2014 年に雌が巣を作って約 3 週間卵を抱いていた。しかし 2015 年にはとうとう雄をおいて隣の縄張りに行ってしまった。また 2004 年ホンドリヤマネズ、2005 年、2007 年がハイマツ、2008 年がハクサンシャクナゲ、ここはオコジョに卵を襲われたので、同じ年に 128m 離れたガンコウランのところに営巣というように、多様な植生を使って巣を作った雌もいた。一方ハイマツの向こう側のササの中で 2006 年に巣を作った雌は、2007 年には 13m 離れたササの中で作った。2008 年は 57m 離れたササの中で、2009 年には 76m 戻ってきて作り、2012 年にはみどりが池のササの中で作った。これはササしか使わない雷鳥の例である。

### 〔捕食者〕

ワトソンと言う世界で雷鳥の権威と言われる人が、60 数年間研究した世界の平均の一腹卵数を調べた。同じ鳥でも緯度の高いは卵の数が増えると言われている。白夜が有って餌を食べる時間が多いのと、虫や植物が大量発生するので雛を沢山育てることが出来るので産卵数も多くなるといわれている。立山では産卵数は 6 個が平均である。1990 年代に個体数が増えた時には殆ど 5 個の卵の巣ばかりだった。今は 7 卵が多い。個体数が増えると巣と縄張りの環境が劣悪になりストレスになるために、卵数が減少傾向になると思われる。

巣立ち成功率、つまり卵が 6 個あり、その内の 1 個でも雛を育てあげることが出来た巣を成功したとすると、立山は 67.3%。アラスカは 65% である。マーチンさんという人が、北アメリカの鳥 123 種の巣について、どんな巣が襲われやすかを研究した。その結果によると下層植生が最も襲われやすく、次に樹幹部も襲われやすい。最も襲われにくい巣は自分で穴を掘ったキツツキなどで、その穴を利用したシジュウカラなども襲われにくい。この研究ではライチョウ等の地上営巣するものは 70% が成功するので、立山の率とほぼ同じである。

次に巣立ち率であるが、どれくらいが巣立ちに成功するかを調べたものでは、立山は 91% でスコットランド、アラスカとほぼよく似ている。雛は巣立った 1 日目で自分で葉をくわえて食べる。餌を食べて体が冷えてくると母親に抱いてもらい体を温め、温かくなるとまた出て食べる。いつも 2 時間分のデーターをとって調べているが、1 日目の雛の昼の 1 時～3 時までのデーターでは、7 分食べたら 14 分抱いてもらう。9 分食べて 14 分。6 分食べて 14 分。7 分食べて 15 分と言うように外へ出たら必ず親に温めて貰っている。

ある個体の例では 15 時 27 分に見た時には、ササの中の巣に雌がいた。18 時半に来てみたらもう雛が巣立って母が抱いていた。夜 9 時半に来たら 2m 離れたところで抱いていた。翌朝 5 時半に探したら、南東へ 5m の所で見付き雛を抱いていた。ほんのわずかしき移動していなかった。一方、生まれたその日一日で崖を上下して約 500m も移動する雛も観察されている。

羽が変わるごとに雛から幼鳥、若鳥と呼び名が変わる。4 週間目くらいでは茶色のベレー帽のような冠羽がなくなり幼鳥となる。60 日くらいで若鳥となるが、翼の風切り羽が灰色から白へ変わり、90 日で独立する。6 月 26 日に巣立ちした家族を見ると、1 日目に雛が 5 ついた。4 日目に雛は 5 つで 100m 動いている。19 日目にはもう雛 1 個

ヒナ(初生羽)→ 幼鳥(幼羽)→若鳥(若鳥羽)  
換羽とともに成長していく





になっている。雛の行動圏を見てみると、雛→幼鳥→若鳥と行動範囲を広げていき 90 日くらいで親から別れほかの雄などと行動している。秋には小集団を形成し、雪が降らなくても白くなり、暴風雪が続く厳冬期立山室堂ではごく少数の雄だけが残る。

卵から成鳥までの生残について、例えば卵 6 個の巣が 10 家族とすると、そのうち 3 家族はオコジョに襲われて 7 家族残る。それが無精卵であったり、孵化しても長雨などで低体温となって死んで巣立ちできないものが 9% いるので、卵 5 個の家族が 4 つ、卵 6 つの家族が 3 つとなる。このうち 58.5% の家族しか残らないので、3 家族は 1 か月以内に全滅する。残った 4 家族のうち秋口まで残るのが 31.3%、7 羽が若鳥になる。越冬が有って翌年には 2.8 羽いなくなり 4.2 羽しか残らない。私達がとったデータでは、60 個の卵のうち 4.2 しか残らないが、この状態が 10 数年続くと立山のライチョウは絶滅することになるが、これは実態とは合わない。計算上は 6.2 位残れば個体数は維持できる。卵の 1 割が翌年の春に生き残ればいい、と言うのが今の目安である。現在、立山に 120 の縄張りがあるので、72 羽 ( $120 \times 6 \times 0.1$ ) が若鳥として生き残って行ってくれば、立山の個体数は維持できる。

何年生き残ったかと言う調査では、若鳥に脚輪を付けて調べたところ、1 年目で死んだ個体は雄は 10 個体、雌は 4 個体だった。生存平均値では雄 3.93 年、雌 3.79 年だった。又大人で捕まえたなら雄が 3.76 年、雌が 3 年で、捕まえた時には 1 年は経っているので、+1 したものが大雑把な平均年齢値となる。誕生してから翌年にどれくらい減っていくかを調べると、雄は 87.3% 翌年出て行くが、雌は 60.4% しかいない。雌の方が死にやすいと思われがちであるが、白山や御前山で見つかったのは雌なので雌は遠くへ出て行く可能性が高い。先程話した「2.8 がいなくなり 4.2 残る」と言うのも、ひょっとすれば 2.8 は他のエリアへ移動したと言うことも考えられる。昔は雌が卵を抱いたり雛を育てたりで襲われやすく、雌の数が少ないと思われていたが、雄も雌も殆ど同じである。寿命については立山では 13 年生きていた個体が 2 個体、雌では 12 年生きていた個体が 1 個体いる。13 年生きていた個体の内、1 個体は去年も生きていたので、今年の春に行って生きていれば 14 年生きてることになり、最年長記録である。大町の山岳博物館で飼っている個体は 8 年ちょっとなので、立山のライチョウは長生きである。

ライチョウの襲われた後、落ちている羽の様子を見ると、何に襲われたかが分かる。ライチョウの尾羽の羽柄が残っているものは鳥に襲われたもの、噛み切られているのは哺乳類に襲われたものと思っている。立山ではキツネ、テン、オコジョが襲っている。オコジョがよく巣を襲うので、駆除したらいいのではと言う人がいるが、ライチョウとチョウノスケソウとオコジョは、世界の分布域は殆ど同じである。チョウノスケソウは周北極要素なので同じように北極圏から氷河期に日本にやってきた。それでライチョウとオコジョはついてまわりで、ライチョウにとってオコジョに襲われるのは織り込み済みである。鳥ではハヤブサ、チョウゲンボウが殆どで、イヌワシは立山では殆どない。私は 40 年間調査しているが、イヌワシがライチョウを襲ったのは一度も見えていない。ライチョウと密接な関係にある天敵はいないので、私は天敵とは言わず捕食者と言っている。ハヤブサとチョウゲンボウについて標高 2200m から 3015m の所で調査した結果、6 月に見張りしている雄の殆どがハヤブサに食べられてしまう。チョウゲンボウは 7・8 月に多いが、チョウゲンボウの食性は昆虫類で、ちょうど立山ではこの時期昆虫類が沢山出る頃で、昆虫を食べるために上がってきたチョウゲンボウに雷鳥の雛が襲われる確率が高い。カラスは 2・3 年前に巣を襲って全部卵を食べたと新聞に出た。どこからか卵を持ってきて雪渓上で食べているのを 3 回ほど見ている。立山は日本の高山域

ライチョウとともに  
日本の高山帯に生きる植物・哺乳類



ライチョウ *Lagopus muta*



チョウノスケソウ *Dryas octpetala*



オコジョ *Mustela erminea*



では一番古くからカラスが入っている山域である。ライチョウの食べられ方を見ただけで何が食べたのかが分かり、キツネは噛み砕いてしまう。テンに雄が穴の中に引きずり込まれたり、ハヤブサが食べると首だけを残すので、雪渓上に首が落ちていることがある。

立山のライチョウと人間の関係は近い。40年間やっていて一番驚いたのは、雄の調査をしていた時、急に雄が走り出して沢山人のいるベンチの下に身を隠した。上空を見たらノスリが飛んでいた。ライチョウは人を利用する事を知っている。みくりが池の遊歩道の石畳のすぐ近く、僅か 17cm のところに巣を作っていたこともある。立山の室堂近辺は人間と密接な関係を保てるので、雛はよく残る。立山には 100 万人の客が来るので捕食者は近づけないが、人が入れないようなところではよく襲われる。

真冬天気の日に昼の 11 頃昼寝をしているライチョウを見つけた。夕方 4 時半になって、風でどんどん雪が積もっているのにまだ寝ていた。5 時半に起きて餌を食べてまた寝た。冬のねぐらを雪穴と言う。雪の中に入って頭を出して寝る。寝ている間に糞をする。夜間積雪が有るので夜中に息苦しくなって上へ上がり朝に出てくる。出て行った後の穴の中に糞が残っているので、1982 年から 5 年間、全てのねぐらの糞の数を数える調査を行った。だいたい休憩中 9 分 40 秒に 1 回くらい糞をする。糞の数で何時間いたかが分かる。30 個有れば 5 時間いた事になる。今までに 64 個の糞で 3 段になっており、夜中に 2 回上へ上がっていた雪穴が有った。

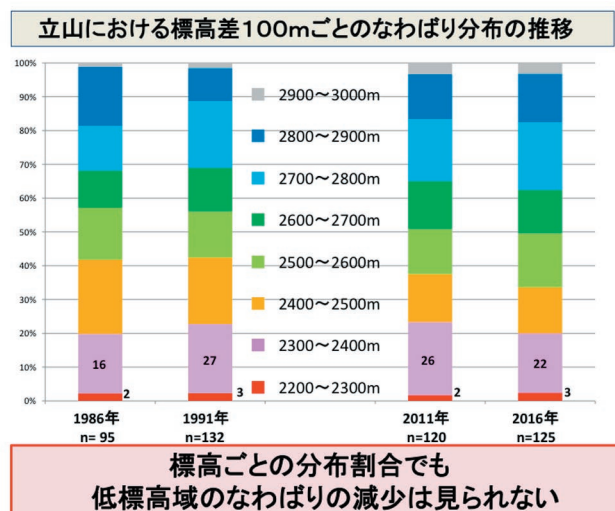
個体数について立山では 440ha を毎年調査している。傾向としては少しずつ増えている。減っても 1,2 年で戻る事を繰り返している。これが本来の姿であると思う。2006 年～2014 年までは殆ど変わらないが、この前の 9 年間は雪解けが早かったり残雪が少なかったりした。1998 年に半分に減ったのは、この年は 6 月 20 日時点でもう雪が無くて夏山だった。調査に行った時には繁殖して雛がかえっており、見はりの雄もいなくて確認された数が減ってしまった。こういう事情もある。雪とライチョウの関係を調べたら、雪解けが早い年は早く産み、遅い年は遅く産む傾向にある。

#### 〔温暖化の影響〕

温暖化の問題では、ライチョウに真っ先に影響が有ると言われている。低標高域の縄張りが消失し個体数が減少する、営巣地点が寒冷な北斜面へ移行するだろうと言われているが、薬師岳と朝日岳の 30～40 年間の調査結果では低い所のデータを見ても殆ど変化がない。日本で一番低い朝日岳の 1930m の縄張りも消失していない。1986 年から約 30 年間の調査では低い所の縄張りがなくなっていない。又見つけた巣の斜度と斜面方位については、東西南北を 90 度の平面変化で調べたが、30 年間の変化は見られなかった。温暖化の影響はわずかで、30 年間の調査ではなかなか現れてこないのかもしれない。立山博物館の花粉分析のデータから、14000 年前からの植生の変化が分かるが、標高 2250m の今のライチョウの生息地は、温暖化の時にはブナが有ったそうだ。室堂辺りはダケカンバ林の中で、7000 年前は 2600m にはハイマツが無かったことも分かっている。この温かな時期をライチョウは乗り切ってきた。

様々な調査をしてきたが、糞の菌についても調査した。雷鳥が糞をするまで待って、したらすぐ試験管に入れて検査機関に出す。いままで 600 検体とってきた。サルモネラ菌、腸管出血性の O26,111.156 などを出していない。出ているのは通常の大腸菌である。鳥由来の大腸菌は無いと言われており、岐阜大学の平井先生の研究では、ライチョウの大腸菌は哺乳類由来の尿管から出る菌であるとの結果が出た。キツネか登山者の尿が原因かもしれない。危険な菌ではないが今後注意が必要である。

2013 年から赤外線センサーカメラで調査しているが、昨年 10 月 6 日の夜中に標高 2350m の所でシカが 2 頭写っていた。食性は荒らされ





ていなかったが、立山にもいよいよシカが入ってきた。南アルプス荒川岳、赤石岳に行くと、獣除けのフェンスが有り登山者はフックを空けて入って行かなければならない。できればこんなことは無い方がいいので、何らかの対策をとって行かなければならないと思っている。

#### 【結び】

最後ですが、私が一番言いたかったことは「たくましい雷鳥」と言うことである。雷鳥は温暖化を乗り切ってきた。噴火を乗り切ってきた。地獄谷では有毒ガスに耐えてきた。隔離分布していて頸城山塊には10つがい、イザルガ岳には1つがいと個体を維持している。白山では雌が1個体で8年間生存した。距離2km、標高差350m離れた縄張りへ侵入してツガイ外交尾をしている。富山大の豊岡雪子さんの研究によると、室堂付近ではかなり近親交配が進んでいる。7000年も前から数が増えていないので最もだと思われるが、近交弱性の兆候が見られないので何か体に持っているのかもしれない。又立山では色々な所に巣を作る。そして多様な食性、植物では花芽、葉、茎、特に葉食の鳥は陸の鳥ではウソと雷鳥くらいで、41科137種の植物を食べている。葉はセルロースなので盲腸が発達していて盲腸の中でバクテリアにセルロースを分解してもらって水分、カルシウム、カリウムを吸収している。このことが世界盲腸学会で、ライチョウの盲腸について発表されている。ライチョウは人を利用して身を守る等中々大した奴である。ライチョウはここが好きだからここに生きている。今後色々な研究者とライチョウだけでない様々なデーターをつき合わせて、高山の生態系を守っていかねばならないと思っている。

### 乗鞍岳自然観察会に参加して

岐阜大学3年 田口 愛珠

今回、初の乗鞍岳でしたが登山道は歩きやすく、知識豊かな野鳥の会の皆さんと登ることが出来ました。朝はバスが出発できないトラブルがあったものの、縄張りの見張りをするオスのライチョウを何羽も見られました。運良く帰りのバスではメスのライチョウまで見ることが出来、天気も崩れませんでした。登山道にライチョウの糞や砂浴びの跡があり、いかにライチョウに近い場所にいるかを実感しました。現在ライチョウの飼育下繁殖が一步步進みつつありますが、野生のライチョウがこれ以上減る前に生息、繁殖状況をつかみ、植生とともに回復していけたらと思いました。



福井氏撮影

伊藤 愛

この度は、乗鞍岳でのライチョウ観察に参加させていただきありがとうございました。最初はバスが遅れていたためにスキー場を散策することとなりましたが、初めてカッコウやホトトギスを観察できとても嬉しかったです。バスも幸い出発しましたが、時間が遅くなったためもしかしたらライチョウは見られないかも...等と思っていました。しかし、御嶽山よりもすぐに見つかり驚きでした。しかも、雄2匹の縄張りでの睨み合いや飛んでいる姿、ライチョウ独特の鳴き声等、様々な行動の様子が観察できてとても興奮しました。また、福井先生がレンズを貸してくださり、ライチョウやカヤクグリを撮影させていただきました。高倍率レンズは綺麗で感動しました・・・本当にありがとうございます。

昨年の御嶽山に続き高山の登山は2回目で緊張していましたが、特にトラブルもなくとても楽しく登ることができました。野鳥の会の皆様、誘ってくださった福井先生には大変お世話になりました。本当にありがとうございます。

荒木 一穂

昨年の御嶽山に引き続き、福井先生のご厚意で、乗鞍山のライチョウ観察に参加させていただきました。本当に有難うございます。意気込んで早朝に出発したのですが、曇平までの道路の状況が良く

なかったため、バスの運行開始まで、雪の無いスキー場で散策をしました。ここでは、ホトトギス、カッコウといった夏鳥の鳴き声を聴き、ワラビ、イタドリ、ウドなど春の山菜が多く芽吹いている様を観察できました。

散策の終了後、幸いバスも動き出し、豊平でのライチョウ探しは11時から14時頃まで行ないました。今回は至近距離での観察は実現せず残念でしたが、魔王岳では、縄張り争いで岩の上に立ち睨み合うオスを二羽、富士見岳ではハイマツの下に隠れるオスと、独特の鳴き声を聞くことができました。険しい高山を背景にして、遠目から観察するライチョウはとても逞しく、美しかったです。また、運の良いことに帰りのバスで、メスのライチョウの姿を確認できました。これから産卵の季節、頑張ってください。



## 飛驒の峠【その1】

木下喜代男

### 「飛驒の峠」連載にあたって

「山の国」飛驒は「峠の国」でもある。他国へ行くためだけではなく、飛驒国内の移動でも峠を越えねばならず、昔から多くの峠があった。交易など他国と結ぶ人と物の流通経路として、日常では杣仕事や炭焼、猟など生活の道として、多くの人や牛馬が行き交った峠道。

近代になってそのうちのいくつかがそのまま自動車道となったが、峠の下に隧道が穿たれ、あるいは別ルートに車道ができたいくつかは長年の役目を終えて山に戻り、また戻りつつある。そして今や人々の記憶からも消え去ろうとしている。そんな峠道がいとおしくて、実際歩いてみた記録がこの小稿である。おそらく最後の旅人として。

峠道に入ると大部分は既に笹藪に覆われ、倒木があつたりしたが、そこには長い年月の間に踏み固められたしっかりした道が残っていた。藪漕ぎなどの苦労はあつたが、その峠道が記憶しているであろう歴史上の出来事などに思いを馳せながら歩いていると、牛にうず高く荷を積んだ牛方(どしま)や、旅人など昔の人に出会いそうで、まことに楽しいものであつた。

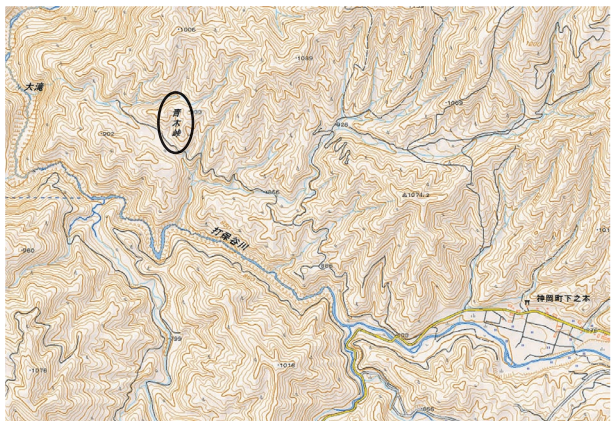
この連載では、まずこのような役目を終えて消えつつある峠(初出=「飛驒学の会」紀要『斐太紀』12号に掲載のものに加筆)をいくつか紹介し、あと歴史の道として保存され、あるいはそのまま登山道として利用されている峠道、そして自動車道になったものの通る車が少なく、冬期間は除雪されないため雪に埋もれている寂しい峠も順次載せてゆきたい。

### 飛驒の峠-1 青木峠(標高 830m) 一山之村から出稼ぎの馬が越えた峠

今よりずいぶん貧しかったけれどやさしかった人々が、雨の日も雪の日もひたすら歩いて越えた、いにしへの峠への関心は尽きない。日本人がまだ自然と調和してゆったりと生きていた頃だ。

昔の飛驒の山村のたたずまいを今に残している飛驒市神岡町山之村地区は「最後の飛驒」などと言われ、その風土を愛する人は多い。この天上の別天地は六つの峠に囲まれており、どこへ行くにもそのうちの一つを越さなければならなかった。それは伊西峠、唐尾峠、青木峠、山吹峠、大原峠、笈破(おいわれ)峠である。このうち以前から気になっていたのは、かつて春になると富山平野へ出稼ぎに行った馬たちが越えたという青木峠だ。

米どころの富山平野では、農耕馬の飼料を刈る山が





近くにないなどの理由で専ら隣県からの借馬に頼り、ちょうど農耕の時期が遅い北飛騨（主に宮川沿い）では、4月上旬になると多くの馬を富山の農家へ貸し出した。田植えが終了する6月上旬までの約60日間の契約で、6月中旬には帰ったという。これを飛騨では「作馬（さくんま）」と呼び、富山では「里馬」「手間馬」と呼んだ。富山ではその手間賃を主に米で払ったため、米不足の北飛騨では大いに助かったのである。この制度は昭和30年のはじめまで続いた。青木峠の入り口に下之本という集落があり、ここのK家で、85歳のおばあさんに次のような話を聞くことができた。

この山之村からも毎年10頭以上の馬が出稼ぎに行ったが、K家では飼っていた3頭のうち2頭が、他地区の馬と一緒にまだ多くの雪が残っている青木峠を越えた。その時は家族皆で峠まで付き添い、涙ながらに見送った。馬たちは男衆と共に跡津川へ下り、越中東街道の土（ど）で待っている馬喰（ばくろう）に引き渡された。山之村が新緑に覆われる頃、重労働を終えた馬は賃金の米（家によっては金）をもらって帰ってきた。どの馬も連日の激しい労働でげっそり痩せ、目はくぼんでやつれた姿であり、迎える時も涙が止まらなかった。

この話を聞いた時、ものを言わぬ馬がかわいそうで、じいんとしてしまった。このあとさらに自家の田の耕作に精を出す馬もいたのだが、あとの時期は家族より先に給餌されるなど大切にされ、盆正月は特別に大麦、大豆の蒸したもの、ふすまなど食べさせてもらったそう。なおこの峠は、作馬だけでなく山之村の人が富山などへ行くときにも通った。

さて峠歩き。実は9月に一度入ったのだが、地図にない新しい林道のため峠道の入口がどうしても見つからず引き返した。下山後地元の人からルートと峠にあった地藏様の移設場所を教わった。そして道の途中には馬頭観音もあるはずだと聞いた。その石仏を拝顔したくて、11月のはじめの紅葉の時期に再度おもむいた。

下之本集落の南側を流れる打保谷川下流の橋の手前から林道（施錠あり）が北西方向に入っている。旧峠道はほぼ林道沿いにある。この林道を約1kmたどると分岐点があるので峠道は左へ入る。林道はいったん谷へ降りるが、橋が崩れていた。人が入った形跡のない道は笹が覆い、倒木、落石があるが、形状はしっかり残っていた。（写真1）

はじめは打保谷川の支谷を左に見ながらの急峻な地形を行くが、次第に谷から離れて緩やかな地形になる。一面藪に覆われているこのあたりに、江戸期下山村という小さな集落があったが、豪雪や飢餓で廃村になってしまったという。地形はさらに平らになり、ようやく分水嶺の峠に出る。峠といっても尾根の最低鞍部（タワ）でなく広い地形になっていて、一般的な峠とは少し趣がちがう。（写真2）

静寂そのものの峠からは今にも馬のいななきが聞こえそうだった。峠の向うにもはっきりした道がありしばらく歩いてみたが、その先は藪に没していたので引き返す。登る時は道端にあるはずの馬頭観音に気がつかなかったが、帰路見つけることができた。（写真3・4）

半分落ち葉に埋まってござったこの石仏は、その昔下之本集落の人の馬が作馬の帰路に谷へ滑落して死んだため、飼い主が愛馬慰霊のため遭難場所に安置したものだとのこと。馬頭観音様はむかしの人の優しさそのままのお顔であった。今と違っ

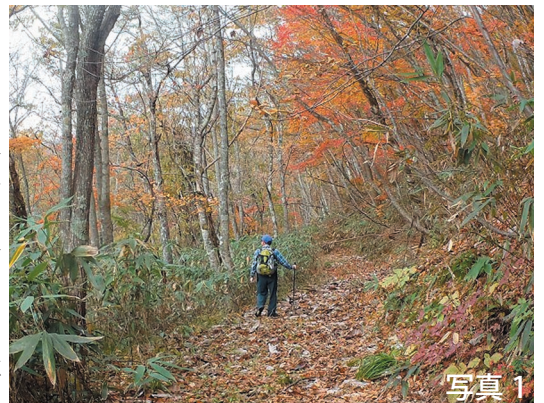


写真1



写真2



写真3・4



て馬や牛が、飼い主と同じ屋根の下で家族同様に暮らしていた時代の話である。そして頂上にあつて皆が道中の無事を祈って手を合わせた地藏菩薩様は、集落に近い林道分岐の少し上の旧道に移してあつたが、こちらもいいお顔をしておられた。(写真5・6)

下之本集落から見える黒部五郎岳の稜線はもう冠雪しており、冬はすぐそこまできていた。

(平成24年11月5日)



## 『自然観察会』

### ☆水生昆虫の調査

7月23日(日)(午前中に終了予定です)

集 合：午前9時、市民プール駐車場(赤保木町)(小雨決行、増水時中止)

服 装：濡れても良い服装&足もと

昨年に引き続いての調査。トビケラ、カワゲラ、カゲロウなど様々な昆虫の幼虫を採取して種類や数を調べ、川の状態知ることができます。川上川と宮川の2地点で調査の予定です。

### ☆アサギマダラ マーキング会

8月27日(日)(荒天の場合、9月3日に延期)

集 合：午前8時、道の駅・ひだ朝日村駐車場

※集合後、乗り合わせて移動します、15時半頃解散予定です。

持ち物：捕虫網(貸出しもあります)、油性フェルトペン(黒・細書き用)、弁当  
飲物、メモ用紙、帽子、雨具、日除け対策グッズ、その他

指 導：鈴木俊文さん(岐阜県昆虫分布研究会)

多くの個体が秋になると南西諸島や台湾まで南下することで知られる蝶、アサギマダラ。今年もマーキングの会を開催します。

## 『第7回乗鞍フォーラム』(8月11日)

※今年は「山の日」に乗鞍岳で開催されます、是非ご参加ください。詳細については同封のチラシを参照して下さい。なお、親子で参加の場合はバス代が補助される場合があります。詳しくは環境政策推進課まで問い合わせて下さい。

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人2,000円 家族3,000円 団体5,000円

あなたの知人、友人に入会をおすすめてください

・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第69号(深緑号) 2017年7月15日発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋

TEL: 0577-32-7206・FAX: 0577-32-7207

★ <http://iidalaw.net/norikura.html>

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者: 松崎 茂

E-mail: ponykun0428@hidatakayama.ne.jp TEL: 0577-34-4703

表紙写真提供: 小池 潜

印刷: 山都印刷